

関東考古学フェア遺跡発表会

「発掘された関東の遺跡 2026」

令和8年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東ブロック協議会連携事業



開催日時：令和8年6月28日（日）10：30～15：15

場 所：公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター

主 催：全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東ブロック協議会連携事業
関東考古学フェア実行委員会

今年も関東考古学フェアの季節がやってきた！

抽選でオリジナル
カレンダーが
当たります！

関東考古学 フェア

スタンプラリー 2026

スタンプラリー期間

2026 6.14(日) ▶ 11.23(月)

関東各都県の埋蔵文化財センターや資料館などを巡りながら歴史を身近に感じてみませんか？
「見て・歩いて・体感して」スタンプラリーや展示・各種のイベントを楽しみながら、考古学に触れてみましょう。

3都県以上で3か所以上の対象施設を見学してスタンプを集めよう！

関東考古学フェアに關しては
・全国埋蔵文化財法人連絡協議会サイト
<http://www.zenokoban.com/>
または各法人サイトをご覧ください。(スタンプラリーマップ参照)
※スタンプラリーシートは上記URLからもダウンロードできます。

●お問い合わせ
(公財) 茨城県教育財団 TEL: 029-225-6587
関東考古学フェア実行委員会事務局(平日のみ9:30 ~ 16:30)

全国埋蔵文化財法人連絡協議会
関東ブロック協議会連携事業企画

受付開始 10:00～

【午前の部】

開会挨拶 10:30～10:35

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東ブロック協議会連携事業

関東考古学フェア実行委員会委員長法人 郡司 寿

(公益財団法人茨城県教育財団事務局長)

発表1 10:35～11:15

千葉県富津市 史跡内裏塚古墳群～房総半島ウォーターフロントの古墳群～

佃 沙奈(千葉県富津市教育委員会)

発表2 11:15～11:55

群馬県東吾妻町 天竜遺跡・小田沢遺跡

～銅鏡と浄瓶 先進文化薫る古代吾妻郡～

飯塚 聡(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)

昼食休憩 11:55～12:55

【午後の部】

発表3 12:55～13:25

茨城県つくば市 下河原崎谷中台遺跡～県内最大級の旧石器製作跡～

天野早苗(公益財団法人茨城県教育財団)

発表4 13:25～13:55

神奈川県厚木市 中依知天神横穴墓群第2地点

～石積施設を有する横穴墓の調査～

池田 治(公益財団法人かながわ考古学財団)

休憩 13:55～14:10

発表5 14:10～14:40

東京都北区 中里峽上遺跡～豊島評衙の成立に関わる集落～

島崎瑛美(公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター)

発表6 14:40～15:10

埼玉県本庄市 東本庄遺跡～大量のかわらけが出土した遺跡～

高橋一生(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

閉会挨拶 15:10～15:15

発掘された関東の遺跡 2026

千葉県富津市 史跡内裏塚古墳群

～ 房総半島ウォーターフロントの古墳群 ～

佃 沙奈 (千葉県富津市教育委員会)

1 海上交通の要衝に造営された古墳群

内裏塚古墳群は房総半島中央部、東京湾に突き出す富津岬の基部にあり、千葉県富津市と君津市の境を流れる小糸川下流域左岸に展開しています。一帯は標高 8m ほどの沖積地で、湾に面して数条の砂丘列が形成されています。古墳の多くはこれらの自然砂丘の高まりを利用して築造され、5 世紀半ばから 7 世紀前半にかけて、総数 49 基（前方後円墳 11 基、円墳 19 基、方墳 7 基、形状不明 12 基）の古墳群が約 2.5 km 四方の範囲に造営されました。うち 23 基は墳丘や石室が現存しています。国史跡であった内裏塚古墳に加え、上野塚古墳ほか 7 基を追加指定し、令和 7 年 9 月に「史跡内裏塚古墳群」ととなりました。古来より東海系土器や漁撈具が出土しており、海の道を介して西方文化を受容してきた文化の折衷地域です。古墳時代にも、房総半島最西端の地として、ヤマト政権東国進出の要衝となり、巨大前方後円墳は洋上からのランドマークであったと考えられます。



東の空からみた内裏塚古墳群

2 内裏塚古墳群の被葬者

5 世紀に朝鮮半島を経由して伝来した最新の土木技術は、中央だけでなくヤマト政権と結びついた地方豪族にも付与された可能性が指摘されています。これにより、小糸川流域でも低湿地の開発が進んだと考えられます。小糸川下流域の開拓とともに、古来より海上交通の要衝であった一帯を勢力下においた新興勢力が、5 世紀半ばに内裏塚古墳を造営するのです。内裏塚古墳の被葬者は、副葬品に朝鮮半島由来の鉄製武器・武具、農工具が主体を占めており、武人的性格の強さを窺い知ることができます。中でも古墳時代の鳴鶴は出土数が極めて少なく特殊なものです。そして 6 世紀半ば以降、内裏塚古墳を核とした海辺の古墳群の形成が本格化していきます。『国造本紀』には、

この地を治めるリーダーとして「須恵（周准）国造」が記されています。内裏塚古墳の被葬者は、その系譜に当たる人物であり、以後の被葬者はその一族であると考えられています。また、その人物は「倭王・済」の時代に中国王朝から郡太守に叙された列島屈指の有力者だとする見解もあります。

3 古墳時代墓制の階層性を示す古墳群

5世紀後半に古墳の規模は一時的に縮小し、磯根崎近郊に弁天山古墳が築造されます。以後は再び小糸川下流域に戻り上野塚古墳が築造されますが、後続する6世紀前半の古墳は確認されていません。再び、6世紀半ば、九条塚古墳の築造を皮切りに100m級の大型前方後円墳が連続して造営されます。九条塚古墳の被葬者は、一帯の中興者的存在であったと推測されます。これ以降、中型前方後円墳、円墳群の造営も開始され、首長級の大型前方後円墳、中規模前方後円墳、30m級大型円墳、20m級以下の円墳という、およそ4段階の階層性が認められようになります。6世紀末には、畿内で前方後円墳の造営が縮小してもなお、周溝全長202mの稲荷山古墳や、墳丘長122mの三条塚古墳の築造が続きます。さらに、7世紀に入ると従来の大型前方後円墳から、大型方墳と、中小型方墳の階層性に再編されます。そして、仏教文化の到達とともに、内裏塚古墳群を造営した首長層は寺院造営へと権威の象徴を転換します。

4 磯石と埴輪からみる遠距離交流

内裏塚古墳にある石碑の台座には石室石材が転用されています。泥岩質と二枚貝の生痕化石が特徴の「磯石」です。磯石は、内裏塚古墳より南へ約6kmの磯根崎付近で採取されたと考えられます。小糸川以南にも海岸の転石を用いた横穴式石室の文化圏があり、須恵国造の影響力が及んでいたようです。石の少ない房総半島において海岸の産出地を掌握し、独自の加工技術を確立したことは、須恵国造が有力首長となり得た一因と思われます。産地同定には注意が必要ですが、磯石は、東京都赤羽台第3号墳、埼玉県将軍山古墳などの石室にも使用されています。また、群馬県や栃木県西部、埼玉県北部に分布する低位突帯を有する円筒埴輪も、内裏塚古墳群から出土しています。内陸の古墳との繋がりは、海と河川の交流路からもたらされており、内裏塚古墳群によって生み出されたウォーターフロントの景観は古東海道へと引き継がれ、水運を担う港湾として発展していくのです。



三条塚古墳 磯石を用いた横穴式石室

5 郷土愛に守られた景観

これほどの古墳群が遺されていることは、開発の波が及ばなかったことに加え、郷土愛も作用しました。江戸時代に一帯を治めた飯野藩主は内裏塚古墳を敬い、前を通る際は馬から降りたと伝わります。また、内裏塚古墳の発掘調査に携わり、文化財保護に尽力した小熊吉蔵は、内裏塚古墳群の中心地にある飯野小学校長を務めました。小熊氏の地域教化により、村民の郷土史への理解も高まったと推察されます。地域に根付いた崇敬の心が、今に残る内裏塚古墳群の姿を守っているのです。



内裏塚古墳出土 鹿角製鳴鐃

群馬県東吾妻町 天竜遺跡・小田沢遺跡

～ 銅鏡と浄瓶 先進文化薫る古代吾妻郡 ～

飯塚 聡 (公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1 天竜遺跡・小田沢遺跡

天竜遺跡と小田沢遺跡は、群馬県
あがつま ぐん ひがしあがつま まち
北西部に位置する吾妻郡東吾妻町
なかのじょう
に所在します。いずれも中之条盆
あがつま がわ
地南部、吾妻川右岸の河岸段丘上
はなさん
の榛名山の北麓に近接する平坦地
に立地します。吾妻郡地域は、吾
妻川に沿う長野県と群馬県中・北
部を結ぶ東西路を基軸とし、盆地
内で分岐する南北路上野南西部
から新潟県や福島県にも通ずる、
古くからの交通の要衝でした。



天竜遺跡・小田沢遺跡位置図

渋川市と長野県を結ぶ上信自動車道の建設に伴い、小田沢遺跡は令和2年から5年にかけて、天竜遺跡は同4年から5年にかけて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が実施されました。

2 古代の吾妻郡

吾妻郡は、10世紀の『倭名類聚抄』によると古代には吾妻は「あかつま(阿加豆末)」と呼ばれ、
なか た いさま おおた
「長田」「伊参」「大田」の三郷で構成されていました。また律令の施行細則の『延喜式』によれば、
かみつけのくに ちやくし まき み まき
平安時代の上野国には朝廷直属の勅旨牧(御牧)が9か所置かれ、その一つ「市代牧」は現在
いちしろ
の中之条町市城の地がその由来を伝えていると推定されています。

2キロ余離れた天竜遺跡と小田沢遺跡の間には、上毛野国に4か所確認されている7世紀後半創建の白鳳寺院の一つ金井廃寺があります。その南西に隣接する下郷古墳群では、官衙または豪族の居宅と推定される特殊な建物群や古代道路が検出されました。吾妻川右岸のこの一帯が古代の郡の中心地であったことが判明しつつあります。

3 銅鏡と浄瓶、そして奈良三彩短頸壺

ー飛鳥・奈良・平安の希少遺物の出土ー

◆天竜遺跡 8世紀前半の竪穴建物から、完形の
どうわん
銅鏡が床面に伏せた状態で出土しました。この銅
鏡は、分析の結果原料は国産銅で、器形から7世
紀前半の製作と考えられています。出土した竪穴
あんもん
建物は他よりもやや規模が大きく、暗文土器や須



天竜遺跡出土 銅鏡 口径 13.6 cm・高さ 5.7 cm

恵器も多く出土し、居住者の階層の高さが注目されます。銅鏡がこの地にもたらされた経緯としては、ヤマト王権から上毛野国の代表豪族に下賜されたものが再分配された可能性があります。東国では銅鏡は古墳に副葬する例が一般的ですが、本例では1世紀ほど別用途で使用され伝世していたことがうかがわれます。このほか、9世紀末～10世紀初頭の竪穴建物などから、郷名「大田」または吉祥を表す「大」や、「宴」「馬」等が墨書された須恵器が多数出土しました。

◆小田沢遺跡 9世紀後半の竪穴建物から、9世紀前半のほぼ完形の原始灰釉陶器の浄瓶が出土しました。施釉陶器の大生産地の尾張（愛知県）の猿投窯製と考えられています。浄瓶とは、出家した僧侶が常備すべき十八種類の法具や生活用具の一つで、清らかな水を容れる水瓶のことです。本品は添水口の反対側の胴部に焼成前に「延」が刻字されているのが特色で、全国的にもあまり例がありません。遺跡からは鉄鉢型須恵器片や「寺」「御」「観自在菩薩」等が墨書された須恵器も出土し、こうした仏具や仏事に関する墨書は、1キロ余西の金井廃寺との関連が推察されます。また9世紀後半の竪穴建物から出土した「大田部」と墨書された須恵器からは、6～7世紀に王権直轄の屯倉の耕作地を管理した集団「田部」との関係が想起され、郷名「大田」の起源や吾妻郡の成り立ちを示唆する例として注目されます。

この他、天竜遺跡の南西方4キロの四戸遺跡では、9世紀後半の竪穴建物から8世紀後半に平城京周辺の工房で製作されたと考えられる完形の奈良三彩の短頸壺も出土しています。

銅鏡、奈良三彩短頸壺、浄瓶という、飛鳥・奈良・平安の各時代の希少な遺物の出土は、古代吾妻郡が山間地ながら交通の要衝を成し、古くから中央の先進文化に浴した土地であったことを伝えています。



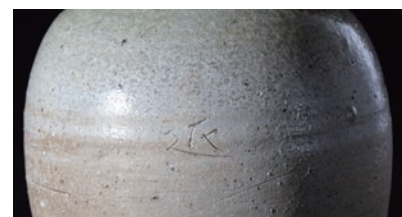
東吾妻町四戸遺跡出土
奈良三彩短頸壺
口径 13.0 cm・高さ 18.7 cm
最大径 25.0 cm



天竜遺跡 銅鏡出土状況
5号竪穴建物（南から）



浄瓶
高さ 28.2 cm・胴部径 11.3 cm



胴部の刻字「延」



出土状況
3号竪穴建物カマド付近（西から）
小田沢遺跡出土 浄瓶

茨城県つくば市 下河原崎谷中台遺跡

～ 県内最大級の旧石器製作跡 ～

天野早苗 (公益財団法人茨城県教育財団)

1 調査概要

遺跡名称：下河原崎谷中台遺跡

所在地：茨城県つくば市下河原崎字谷中台^{あざ}

696 ほか

調査機関：公益財団法人茨城県教育財団

調査原因：上河原崎・中西特定土地区画
整理事業

調査面積：24,652 m²

主な時代：旧石器時代・縄文時代・古墳時代・
平安時代・江戸時代



遺跡位置図 (1/50,000)

2 遺跡の位置と概要

下河原崎谷中台遺跡は、つくば市の南西に位置し、西谷田川^{にしやた}とその支流に挟まれた帯状にのびる標高 23m ほどの台地上に立地しています。区画整理事業に伴い、平成 17 年度から令和 2 年度の 4 次にわたり調査し、3 冊の整理報告書を刊行しました。今回報告書を刊行した 3 次・4 次調査で確認された遺構としては、旧石器時代の石器集中地点、炭化物集中地点、焼土集中地点、礫群のほか、縄文時代早期後葉の炉穴群、古墳時代の集落跡と遺物集中地点、江戸時代の炭焼窯跡などがあり、断続的に土地利用されていたことがわかっています。特に台地縁辺部には広範囲にわたって旧石器時代の石器集中地点を確認し、約 3,600 点の石器が出土しており、県内で確認されている旧石器時代遺跡の中でも最大級の石器製作跡であることがわかりました。



調査区遠景 (南から)



調査風景

3 旧石器時代の石器集中地点と遺物について

石器集中地点は標高 22.5 ～ 23.5mの台地縁辺部に沿って南北 154m、東西 174mの範囲から、9か所の石器集中地点を確認し、集中地点内からは 34 か所の石器の密集部を確認しました。密集部は中央部から南部にかけて密度が濃く分布する傾向が見られました。また、集中部内からは炭化物集中地点と焼土集中地点も確認でき、炭化物の自然科学分析の結果から、25,000 ～ 26,000 年前のマツ科の針葉樹であることが分かりました。

石器集中地点から出土した石器は、ナイフ形石器 61 点、角錐状石器 22 点、搔器 52 点、円形搔器 5 点、削器 6 点、石錐 2 点、楔形石器 4 点、二次加工のある剥片 105 点、微細剥離痕のある剥片 111 点、石核 89 点のほか、剥片類約 3,000 点、敲石 17 点、礫約 400 点などです。ナイフ形石器と角錐状石器は、その形状から獲物を切ったり刺したりするために用いられた道具と考えられ、搔器は、獲物の毛皮の皮なめしに用いられたと考えられる石器です。角錐状石器は、側縁部にほぼ全周する加工が施され両端ないし一端が尖る形状で断面が台形・三角形を呈しており、A T 降灰後（30,000 年前）に出現する特徴的な石器です。出土したナイフ形石器の中には、刃の部分に使用痕跡と考えられる微細剥離痕がみられるものも確認できました。

石器に用いられた石材は主に、栃木県高原山で産出する黒曜石、東北地方などで採取できる頁岩や、茨城県北地域で採取できる瑪瑙、黒色ガラス質安山岩、黒色ガラス質デイサイト（トロトロ石）などです。特定の石材のみで石器を製作するのではなく、遠隔地で産出する石材や、茨城県北地域で採取可能な石材を持ち込み、多様な石材を使って石器製作を行っていたことがわかりました。



4 まとめ

茨城県は南関東などの地域に比べ、関東ローム層の堆積する厚さが薄く、ローム層序で文化層を細かくとらえることが難しい状況でしたが、今回出土した石器の特徴や自然科学分析の結果から、多くは武蔵野ロームⅣ層下部～Ⅴ層段階の石器群であると捉えることができました。

また、これらの資料からは、様々な石材を獲得して石器を製作し、用途により使い分けて生活していた当時の人々の様子があきらかになりました。

神奈川県厚木市 中依知天神横穴墓群第2地点

～ 石積施設を有する横穴墓の調査 ～

池田 治 (公益財団法人かながわ考古学財団)

1 調査概要

遺跡名称：中依知天神横穴墓群第2地点

所在地：神奈川県厚木市中依知

調査機関：公益財団法人かながわ考古学財団

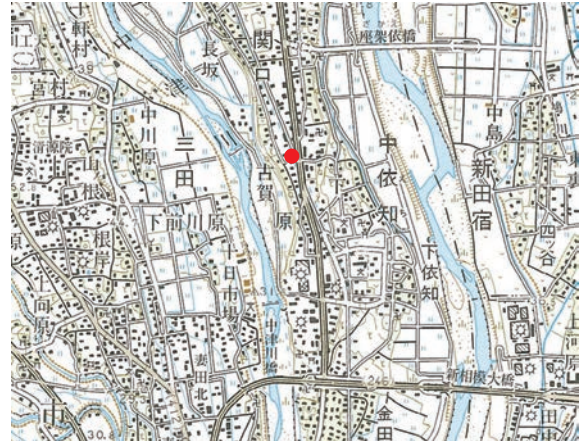
調査原因：一般国道 246 号（厚木秦野道路）

建設事業に伴う事前の発掘調査

調査期間：令和 4 年 5 月～令和 5 年 11 月

調査面積：1,999 m²

時代：古墳時代



遺跡位置図 (1/50,000)

2 遺跡の位置と調査概要

中依知天神横穴墓群は神奈川県厚木市に所在し、小田急小田原線の本厚木駅から北へ約 4 km に位置しています。本横穴墓群は、相模川とその支流の中津川に挟まれて南北に延びる中津原台地の西側斜面に立地し、中津川の沖積低地に面しています。台地上の標高は約 48m、斜面下の低地の標高は約 30m で、横穴墓は斜面の中ほどの位置に並んで造られていました。台地上には、古墳時代後期を中心とした古墳が多数確認されています。

発掘調査は台地上の調査地区も含めて中依知遺跡群と仮称して令和 2 年 11 月から実施し、令和 4～5 年度には西側斜面の地区にも着手して本横穴墓群の調査を行いました。横穴墓は 11 基発見され、そのうちの 6 基では横穴の入口部周囲に石積施設が構築されていました。石積施設は調査例が多くはないため、比較的良好な状態で残っていた本例は貴重な事例です。

3 遺構と遺物について

横穴墓は部分的な調査に留まるものも含めて 11 基が発見されましたが、墓室と墓前域の両方を調査できたのは、1・3～7 号横穴墓の 6 基です。1 号横穴墓は他よりも一段高い位置にあり、それ以外の横穴墓は現状で高低差 18m ほどの斜面の中位に造られ、ほぼ等間隔に並んでいます。いずれの横穴墓も西向きの斜面に対して斜行して南西向きに造られているという特徴があります。3 号横穴墓の墓前域は、道状に斜面を緩やかに下っていて、長さ 18m が検出され、更に調査区域外へ続いていて、斜面下まで残っている可能性があります。

今回調査した横穴墓の中には、羨門（横穴墓入口）の周囲の墓前域壁面に石積施設が設置されていたものがあります。羨門部石積施設と呼ばれています。石積みの高さは、墓前域の底面から 2.5m 以上も残っているものがあり、斜面の削平状況を勘案すると、最高部は 3 m ほどの高さがあったと推定されます。石積施設の形状や構築方法には個々に特徴があり、全く同じというものはありませんでしたが、横穴式石室の前庭部の「見た目」を意識していると推測され

るものもありました。横穴式石室と共通もしくは類似する形状については、石積技術の観点からも関心がもたれます。

墓室の形態は、1号横穴墓以外はいずれも撥形^{はちがた}を呈し、天井部はアーチ形です。墓室の長さは小型の1号・5号横穴墓を除けば、6～7mの長さがあります。羨門は狭く、ローム層を掘り込んだ穴の大きさは幅 0.6mで高さは 0.6～0.8m程度であり、這って出入りするような大きさです。最も大きい9号横穴墓で幅 0.6m、高さ 1.0mほどでした。対して奥壁は、幅 2.5m前後、高さ 2.0m前後の大きさがあります。墓室の床面には、1号横穴墓以外は、拳大前後の河原石を敷いてありました。墓室の奥壁側はやや大きい河原石を並べて棺座^{かんざ}の区画としているものが大部分でしたが、河原石の仕切りとともに 15cm 程度の段差を設けて、棺座を一段高くしているものもありました。

出土遺物は、人骨、ガラス小玉ほかの装身具^{そうしんぐ}、直刀・鉄鏃^{ちよくとう}等の武器^{てつぞく}が墓室内から出土し、壺^{つぼ}や平瓶^{ひらか}、甕^{かめ}などの土器（土師器^{はじき}、須恵器^{すえき}）が墓前域から出土しています。

4 まとめ

今回の横穴墓群調査における最大の特徴は、横穴墓に付設された石積施設です。羨門部に石積施設を有する横穴墓の分布は、関東地方では神奈川県^{神奈川県}の県央地域の内陸部と東京都^{東京都}の多摩地域を中心に分布していることが知られています。今回の調査で保存状態の良い石積施設がまとまって発見され、新たな知見を得ることができました。石積施設の積み上げ方には横穴式石室と類似・共通する点や独自の工夫などが認められ、古墳の石積み工人の関与も窺われます。また、周辺の古墳の被葬者との関係についても関心がもたれます。



3号横穴墓 墓室床面の状況



6号横穴墓 石積施設

東京都北区 中里峽上遺跡

～ 豊島評衙の成立に関わる集落 ～

島崎瑛美（公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター）

1 調査概要

遺跡名：中里峽上遺跡

所在地：東京都北区中里三丁目ほか

調査機関：（公財）東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター

調査原因：道路整備

調査期間：令和5年11月～令和7年3月

調査面積：1,670 m²

時代：古墳時代末～平安時代



遺跡位置図 (1/50,000)

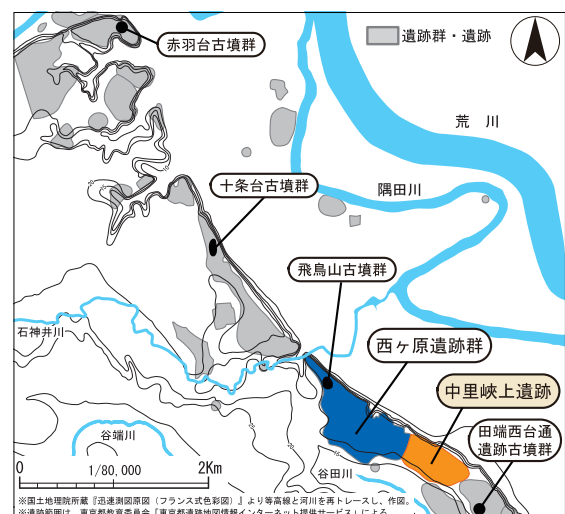
2 遺跡の位置と概要

中里峽上遺跡は、武蔵野台地北東端の荒川を臨む標高20～25mの本郷台に立地しています。縄文時代～近世の複合遺跡で、古墳時代後期～平安時代の遺構が多く検出されています。

また、西側に隣接する西ヶ原遺跡群には、古代の役所である豊島評衙（飛鳥時代／7世紀後半）、豊島郡衙（奈良・平安時代／8世紀以降）が置かれており、律令制下における地方行政と関わりの深い集落と考えられます。

3 中里峽上遺跡の成立と豊島評衙

中里峽上遺跡は、評衙成立以前の6世紀前半から集落の成立が始まり、出土土器の多くが北武蔵系です。近隣には、飛鳥山古墳群や田端西台通遺跡古墳群など、古墳時代後期の群集墳が位置しており、墳丘をもつ古墳やもたない墓など、墓制から、階層分化が進んでいたことが窺えます。豊島評衙では、成立以前の集落や豪族の居宅などは確認されておらず、後の評督（統括する人物）を頂点とする氏族が評衙成立以前から存在していたとは考え難いです。よって、豊島評衙は有力氏族の本拠地から離れたところに造営された評衙と思われ、その本拠地は、出土土器から北武蔵と考えられます。中里峽上遺跡・豊島評衙の出自は北武蔵（埼玉県西部）が想定され、中里峽上遺跡をもとに、これらの集団が豊島評衙造営に関わったと推定できます。



周辺の遺跡 (抜粋) (1/80,000)

4 遺構と遺物について

遺構は、飛鳥時代の^{たてあなじゅうきょあと}竪穴住居跡と^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡のまともりが検出されました。遺物は、^{はじ}土師器や須恵器のほか、7世紀後半の「^{かざ}飾り馬具」や「^{かんぬきかなぐ}門金具」などの金属製品が出土しました。門金具とは、扉を閉じるために差し込む「^{しょうそう}門」という木材などを固定する金具のことです。

門・門金具は、正倉（物資を保管するための倉）や寺院のような公的施設の重要な部分に、使用されたと考えられます。豊島評衙からは7世紀後半の正倉が検出されており、中里峡上遺跡では過去に、7世紀後半代の瓦が出土し、豊島評衙に付属する寺院の存在が想定されます。今回出土した門金具は、このような正倉や寺院で使用されたものかもしれません。そして、門金具が出土した住居跡の住人は、これらの施設に関わる立場にあった可能性も考えられます。

5 まとめ

豊島評衙の成立には中里峡上遺跡が大きく関わっており、造営・運営に携わる人々が集落に暮らし、その痕跡が遺構や遺物に残されています。今回の調査成果は、過去の調査成果と合わせ、豊島評衙成立期の様相を考察する貴重な資料となりました。



古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡



7世紀後半の土師器



7世紀後半の飾り馬具



7世紀後半の門金具

埼玉県本庄市 東本庄遺跡

～ 大量のかわらけが出土した遺跡 ～

高橋一生 (公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

1 調査概要

遺跡名称：東本庄遺跡

所在地：埼玉県本庄市大字北堀字東本庄

調査機関：公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査原因 道路建設

調査期間 令和4年1月～3月

令和4年4月～11月

調査面積 2,565.36 m²

時代 縄文時代・古墳時代から中世（室町時代）

2 遺跡の位置と概要

東本庄遺跡は、独立丘陵である浅見山（大久保山）

丘陵の裾部に連なる微高地上に立地します。標高は

54.9mです。付近には小山川（身馴川）や男堀川が流れ、北東側約 1.0 kmの地点で合流します。

発掘調査の結果、縄文時代の包含層、古墳時代から中世（室町時代）までの遺構・遺物が発見されました。東本庄遺跡の周辺地域には、中世の遺跡が数多く分布しています。西側 1.5 kmに位置する大久保山遺跡群は東本庄遺跡とはさほど離れていないことから関連性があると考えられています。また、東本庄遺跡では膨大なかわらけが出土しており、時期は若干新しくなりますが、北東側に位置する東五十子遺跡でも膨大な量のかわらけが出土しています。

3 遺構と遺物について

中世の居館跡と推定される遺構は、丘陵の微高地から低地にかけての緩やかな傾斜地から検出されました。この傾斜地の地山を段状に削って平坦面を造成し、その面に掘立柱建物や井戸を配して居住空間や作業空間を構築していたことが明らかになりました。この段切り状の造成は複数回行われたと考えられます。

調査区の北西側には、幅 2.5mを超える堀跡が2条検出されました。その内側は、細い溝跡や柵跡で区画され、掘立柱建物跡や井戸跡が計画的に配置されていることがわかりました。掘立柱建物跡には、身舎に廂を付けた梁行 5m以上、桁行 10m以上の側柱建物跡、長舎風の建物跡、小型の建物跡があります。建物跡は何度か建て替えられ、時期によって向きや配置が変わっていたことが分かっています。長舎風の建物跡の近辺には、鍛冶炉跡が3基、かわらけ焼成遺構が2基、掘り込みがないかわらけ溜まりが3か所、土壌あるいは溝状の掘り込みを伴うかわらけ溜まりが2か所検出されました。

今回の発掘調査で遺物は、12 世紀後半～ 15 世紀前半のかわらけや柱状高台付皿（坏）、瓦



遺跡位置図 (1/50,000)

しつ 質土器のほか、国産陶器の古瀬戸製品、^{こ せ と}常滑焼、^{とこなめ やき}渥美焼、^{あつ み やき}輸入磁器の青白磁合子の蓋や水注、^{せい はく し こう す ふた すいぢゅう}白磁四耳壺など高級品の破片、その他に和鏡、屋根瓦が出土しています。これらの遺構・遺物から考えられる中世の東本庄遺跡は、在地の武士が居住していた居館のなかに生産施設を取り入れた遺跡と考えられます。

4 かわらけ溜まりとかかわらけ焼成遺構について

東本庄遺跡では、中世（室町時代）のかわらけが膨大な量で出土しました。かわらけとは口クロ成形あるいは手づくね成形で作られた素焼きの土器で、日常的な食器や灯明皿^{とうみょうざら}として使用されていたと考えられています。また、枕草子で「きよしとみゆるものかはらけ」と記されているように清浄な器と考えられていたようで、使用されると不浄なものとなってしまう廃棄されてしまいました。使用後はすぐ廃棄されてしまう使い捨ての器であったため、安価で大量に生産されていました。東本庄遺跡においては、皿形・坏形・鉢形・碗形・盤形^{ばん}のかわらけがありました。中には、底部に孔がけられたもの、片口状のものなど特殊なものもありました。

次に、かわらけ溜まりは、溝跡や土壌などの遺構や、掘り込みがない平坦な面から膨大な量のかわらけが一括で出土した遺構を指しています。かわらけが一括で出土する要因にはいくつかの説があり、饗宴儀礼や神事の使用後にまとめて廃棄された場合、祭祀行為で破砕され埋められた場合などが考えられています。

東本庄遺跡で検出されている中世の遺構・遺物の中で、かわらけが主体に出土した遺構は、土壌、井戸跡、溝跡、かわらけ溜まりがあります。特筆すべき遺構は、手づくね成形のかわらけと瓦質土器の土鍋が出土した、鎌倉時代に推定される第 59 号土壌です。出土したかわらけのほとんどが破片で、完形品の小皿は数点でした。瓦質土器の土鍋は山陰地方の土鍋に類似しており、周辺に分布する大久保山遺跡群や深谷市宮前遺跡^{ふか や し みやまえ}でも出土事例があります。また、室町時代に推定されるかわらけ溜まりでは、14,000 点を上回る口クロ成形のかわらけが出土しました。内面に輪積み痕を残しているものが多く、東本庄遺跡のかわらけの特徴の一つと言えます。かわらけ焼成遺構ですが、第 1 号かわらけ溜まりのかわらけが埋まっていた下から検出された焼土跡がかわらけ焼成遺構の一部と考えられます。また、第 1 号かわらけ焼成遺構は 2 m 四方の焼土跡が検出され、北西側で検出された第 3 号かわらけ溜まりが灰原^{はいばら}と考えられます。出土したかわらけは製品にならなかったものや日常品と一緒に廃棄されていたと考えられます。かわらけ溜まりの中で膨大な量が出土した、掘り込みを伴う第 4 号・5 号かわらけ溜まりでは、それぞれ 6,000 点以上のかわらけが出土しました。完形品が多く、複数枚重なって出土している個体もありました。かわらけの選別や保管場所の可能性が考えられます。

東本庄遺跡では、かわらけの製作から保管、そして周辺各地へかわらけを供給していたと考えられ、かわらけ生産の拠点的な場所であると推測しています。



口クロかわらけが大量に出土したかわらけ溜まり

令和8年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東ブロック協議会加盟法人一覧

(公財) 茨城県教育財団 ※

〒310-0911

茨城県水戸市見和1-356-2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

029-225-6587

<https://www.ibaraki-maibun.org/>

(公財) 千葉県教育振興財団

文化財センター

〒284-0003

千葉県四街道市鹿渡809-2

043-424-4848

<https://www.echiba.org/bunkazai/>

(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 埋蔵文化財調査センター

〒312-0011

茨城県ひたちなか市中根3499

029-276-8311

<https://www.hitachinaka-maibun.jp/>

(公財) 印旛・柏文化財センター

〒285-0814

千葉県佐倉市春路1-1-4

043-484-0126

<https://www.inba.or.jp/>

(公財) 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 鹿嶋市どきどきセンター

〒314-0021

茨城県鹿嶋市粟生字十二神2242-1

0299-84-0778

<https://cs-kashima.jp/maibun/>

(公財) 東京都教育支援機構

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033

東京都多摩市落合1-14-2

042-373-5296

<https://www.tomaibun.jp/>

(公財) とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター

〒329-0418

栃木県下野市紫474

0285-44-8441

<https://tochigimaibun.jp/>

(公財) かながわ考古学財団

〒232-0033

神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

045-252-8689

<https://www.kaf.or.jp/>

(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555

群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

0279-52-2511

<https://www.gunmaibun.org/>

(公財) 横浜市ふるさと歴史財団

埋蔵文化財センター

〒247-0024

神奈川県横浜市栄区野七里2-3-1

045-890-1155

<https://maibun.yokohama-history.org/>

(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108

埼玉県熊谷市船木台4-4-1

0493-39-3955

<https://www.saimaibun.or.jp/>

※ 連携事業実行委員長法人

編集・発行 関東考古学フェア実行委員会

発行日 令和8年6月28日